

声明

今を生きる私たちは皆一様に物語中毒である。と仮定してみるとしよう。

ここでいう物語とは、ある個人が過去の経験を聞き手（時に自分自身も含まれる）の存在を意識して語るものを指す。

「人間は物語る動物だ」というのも聞き飽きた表現ながらに激しく同意で、我々は何かを経験するとそれを物語りしたい欲望に翻弄される。そして、他人の物語を摂取することに関しても見境ない。

その節操のなさはSNSによって益々加速中。聞いてもいないのにどんどん流れてくる自分語りを冷ややかな気持ちで見つめつつも次の物語へと指を滑らせてしまうその中毒性は、もはや粗悪ポテチ。

巧拙を問わず同じような物語が無制限のバージョン化を繰り返して量産され、価値の暴落を招いている。

言葉での表現には限りがあるため誰のどんな“固有”の経験も均一になってしまう。

真実み、切実みは経験主の中にしかなく、物語を通した外部化によって失われ、嘘も本当も同じレベルで乱立している。

語りスキルは社会での地位向上に役立つ。物語バトルは白熱し、良いレトリックはコピーされ類似の“洗練”された物語が同時多発する。

物語において大事なことはきっと、真実であることよりも聞き手を楽しませることで、物語は現実からつまらない部分、エモくない部分を取り除いてできている。

物語の推敲を重ねる過程で、関連する記憶そのものまで編集されてしまい、豊かで複雑な現実を貶める。話の筋からこぼれ落ちた出来事は手の届かないところまで沈んでゆき、再び掘り上げるのはとても難しいし、登場人物として役割を押し付けられた人間はゾンビのようにそのキャラ設定に沿った挙動を繰り返させられる。

これらの弊害について一度自覚してみると、自分の物語欲求との付き合い方に懐疑的になる。

それでも他人とのコミュニケーションにおいて物語戦法は有効で、程良く己の物語を開示しないと人間関係は滞る。

そうして結局は、他人が喜びそうな話題を、使い古した物語の型にあてはめて取り繕うことになる。

ある時ふと、大切な記憶を保護するためには、沈黙が有効かもしれない。と思った。

沈黙といっても完全に押し黙ることではなく、それが共有されるべき時を根気強く待ち、その時が来るまで軽々しく口にしないということ。現実を編集しすぎない、面白く語ることを優先しない、聞き手におもねらないという語り方を採用してみることに。

沈黙は私を少しだけ守ってくれている。

脳に点在する記憶をつなげて物語を創作する責任を自己免除している。

空に光る星を結び、名前をつけて星座にする必要がない、ただその時々星の光り方に無垢に感動していられるような安心感がある。

現実を無理やり“著：自分”の物語に閉じ込めようとしめない態度を貫くには、世界の他者性に向き合う誠実さが必要で、それはなかなか忍耐力のいることだけど、しばらく頑張ることにした。

切実な述懐とよくできた物語の違いを理解し、その場によってまたは相手によって、自覚的に使い分けていきたい。

物語の支配から逃げ延びるために。